

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群 出土品について (1)

—須恵器及び埴輪—

瀬谷 今日子・仲原 知之・
石丸 彩・富永 里菜

はじめに

紀ノ川下流域南岸の岩橋山塊に位置する岩橋千塚古墳群は、4世紀末から7世紀に至るまで総数約900基の古墳が築造された全国有数の古墳群であり、当該地域の古墳文化を理解する上で欠くことのできない遺跡である。

岩橋千塚古墳群は、江戸時代にその大半が

紀州藩附家老安藤家の領地であった後、明治時代初めに村の共有地となり、それ以降、複数の調査が実施されている。しかし、明治時代から昭和時代前半の調査については正式な記録が残されているものが僅かであり、また、当時は乱掘や資料採集も自由に行われていたことも相俟って、岩橋千塚古墳群の出土品の多くが散逸してしまっているのが現状である。

こうした中、和歌山大学には様々な経緯で集められた岩橋千塚古墳群出土と伝えられる資料が存在する。本稿では、これらの資料を紹介する¹⁾とともに、それらの資料が出土した経緯や資料の位置づけについて検討を行うもの

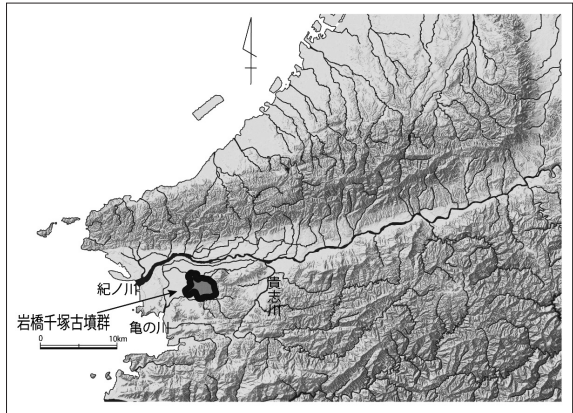


図1 岩橋千塚古墳群の位置

とする。なお資料は、埴輪、須恵器、陶質土器、鏡、耳環、玉類、鉄製品等、多数に及ぶため、報告は3部に分けて行い、本稿ではこのうち須恵器と埴輪について報告を行う。

1. 伝岩橋千塚古墳群出土須恵器の観察

和歌山大学が所蔵する伝岩橋千塚古墳群出土品のうち、須恵器は甗1点、杯蓋または壺蓋1点、杯身1点がある。以下、各資料を紹介する。

甗(図2-1) 口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形で残る。口径13.1cm、胴部径10.5cm、器高14.4cmである。焼成は良好である。胴部下半は回転ヘラケズリ、底部付近は不定方向のケズリが施されている。口径が胴部径より大きく、カキ目により外面の調整がされている。端部は上方を向いて面をもつ。陶邑窯跡群における編年のMT15～TK10型式期の所産と考えられる。胴部外面に貼られた紙には、「海草郡西和佐村大字岩橋字大岩谷ヨリ発見」と記載されている。

杯蓋または壺蓋(図2-2) 完形品で、口径10.6cm、器高3.4cmをはかる。焼成は良好

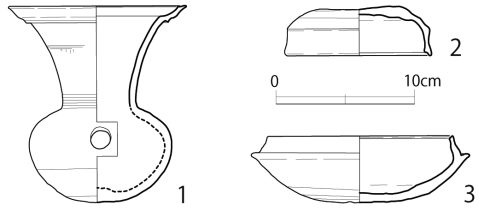


図2 伝岩橋千塚古墳群出土須恵器実測図



写真1 伝岩橋千塚古墳群出土須恵器

である。外面には回転ヘラケズリと回転ナデ、内面には粗いナデの調整が施され、回転ヘラケズリは全体の約3分の1の範囲に及ぶ。ロクロの回転は時計回りである。天井部と口縁部を分ける稜はやや甘い。口縁端部は面をもつ。陶邑窯跡群における編年のMT15～TK10型式期の所産と考えられる。外面に貼られた紙には、「海草郡西和佐村大字岩橋字大岩谷ヨリ発見」と記載されている。

杯身(図2-3) 完形品で、口径13.7cm、体部最大径16.1cm、器高4.9cmをはかる。焼成は良好である。調整は、底部内面には不定方向のナデ、外面には回転ヘラケズリや回転ナデが施され、回転ヘラケズリの範囲は全体の約4分の1の範囲に及ぶ。ロクロの回転は反時計回りである。底部外面に「十」字状のヘラ書きが施されている。器体全体は扁平で、口縁部は低く立ち上がり、受口部の端部はやや上向きに外方へのび、面をもつ。陶邑窯跡群における編年のTK10～TK43型式期の所産と考えられる。外面に貼られた紙には、「海草郡西和佐村□□岩橋字大岩谷ヨリ発見」と記載されている。

2. 伝岩橋千塚古墳群出土埴輪の観察

伝岩橋千塚古墳群出土の埴輪は、円筒埴輪2点と石見型埴輪1点がある。円筒埴輪①(図3-1・WU626) 残存高27.0cmで、底部から2条3段までが残る個体で、焼きひずみがあり、二段目付近で長径21.0cm・短径18.1cmの楕円状を呈する。底部径は16cm程度で器壁の厚さ1.4cm前後をはかる。二段目には2つ、三段目には二段目と直交する位置に1つの円形の透孔が確認できる。透孔も焼きひずみによりいびつな円形となる。外面は橙色を呈し、一部は須恵質で硬く焼き締まる。窖窯焼成と考えられる。外面調整は、右下から左上方向のタテハケ調整で、ハケメ1単位の幅は2.5cm前後である。突帯は断面形状で台形を呈し、タテハケ調整後に連続ナデによって貼り付けられている。突帯は直線状ではなく波打つようになっている。内面の二段目付近には、突帯の貼り付けの際についたと思われる工具痕がみられる。底部外面は、不明瞭であるが板オサエと思われる調整がみられる。底部の端部は欠損しているが端部付近までほぼ残っているとみられ、設置の際に底部を打ち欠いた可能性がある。底部内面は右下から左上方向に強いタテナデ調整を施

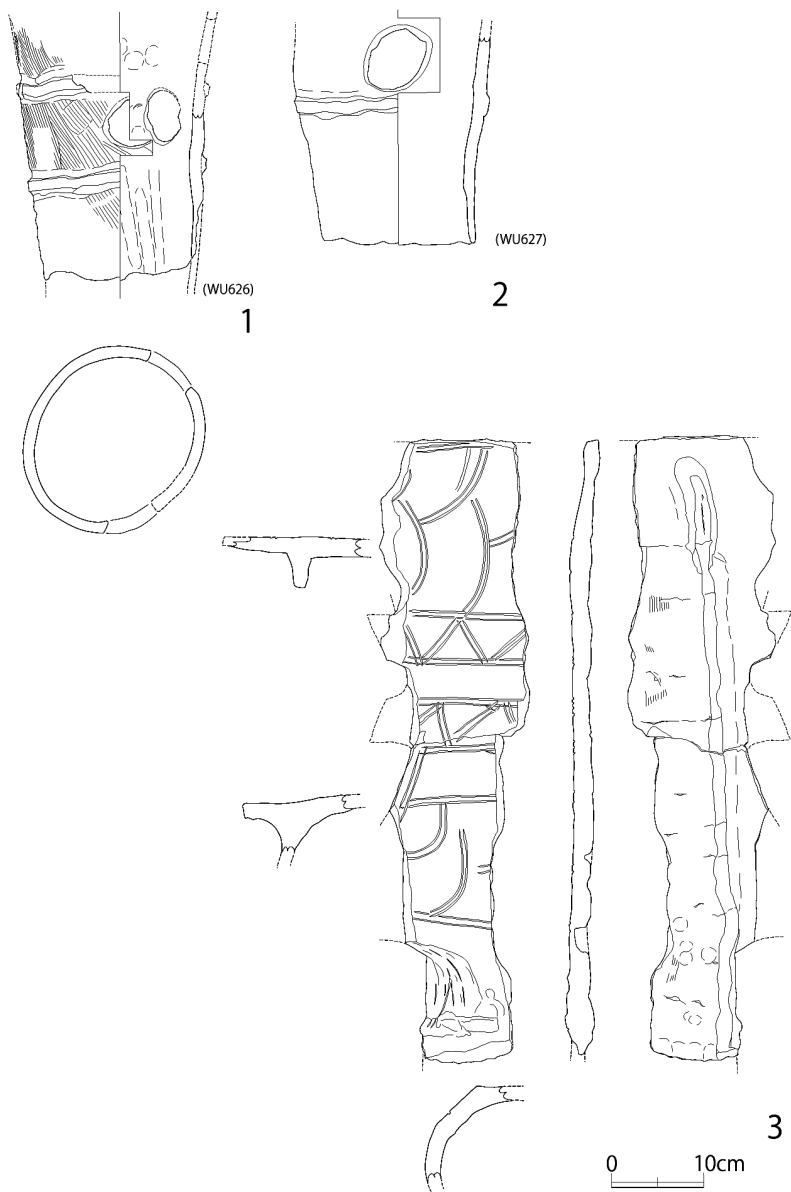
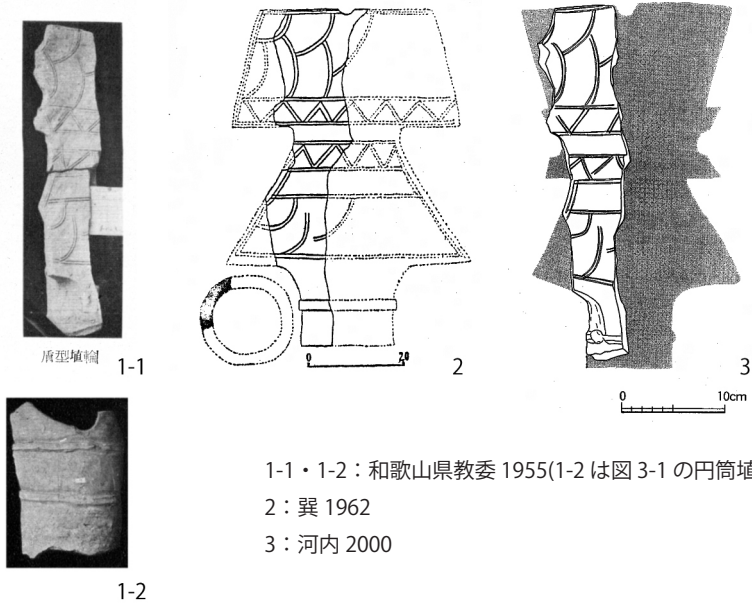


图3 伝岩橋千塚古墳群出土埴輪実測図



1-1・1-2：和歌山県教委 1955(1-2は図3-1の円筒埴輪)

2：巽 1962

3：河内 2000

図4 伝岩橋千塚古墳群出土石見型埴輪 既往報告例

す。胎土に結晶片岩を含み、紀ノ川南岸の土を使って作られたものと推察できる。川西編年のV期の所産(川西1978)の円筒埴輪と考えられる。「海草郡鳴神村字藤谷ヨリ発見」の貼紙が貼られている。

円筒埴輪②(図3-2・WU627) 残存高22.3cmで、底部から1条2段までが残る。器壁の厚さは1.5cm前後をはかる。二段目に正面と対面に2個一對の円形透孔が確認できる。内外面とも橙色を呈し、土師質である。窰窯焼成とみられる。突帯は連続ナデによって貼り付けられ、断面形状は稜線が緩やかな低い台形を呈する。調整は内外面ともに不明瞭であるが、底部内面付近では器壁が薄くなっていることから底部調整が施されたものと考えられる。胎土に結晶片岩を含む。川西編年のV期の所産で、6世紀代と考えられる。「海草郡鳴神村字藤谷ヨリ発見」の貼紙が貼られている。

石見型埴輪(図3-3・WU628+WU629) 2点が接合し、同一個体となる。石見型埴輪の形象部右半部で、上端から基部との接合部分に該当する²⁾。残



写真2 伝岩橋千塚古墳群出土埴輪(円筒埴輪①)



写真3 伝岩橋千塚古墳群出土埴輪(円筒埴輪②)



写真4 伝岩橋千塚古墳群出土埴輪(石見型埴輪)

存高は66.3cm、残存幅15.8cm、厚さは2.9cm前後をはかる。窖窯焼成で、外面にはぶい橙色を呈し、焼成は良好である。形象部表面は、2条一括の沈線により文様が描かれている。文様構成は3分割型で、上段面と下段面には鱗状文、上段帯と下段帯には鋸歯文が施されているが、中央帯は無文である。形象部表面の下段帯下側の破損部付近に径0.7cmほどの刺突文の痕跡が1箇所確認できる。背面には円筒部の接合痕跡が残り、背面上部には円筒部から連続する補強粘土帯が貼り付けられている。円筒部の一部には低い突帯が確認できる。形象部下部と円筒部の接合箇所には突帯貼り付け前にケズリによる整形がおこなわれている。背面は、調整が不明瞭であり、ハケメあるいはナデが施された可能性はあるが、接合痕が残るなど調整は粗い。円筒部分には指圧痕が確認できる。胎土には結晶片岩を含む。

紀伊における石見型埴輪は、5世紀後葉に出現し、当初は無文または無分割であったが6世紀前葉で3分割型の施文が採用され、6世紀中葉以降には施文線刻に刺突文が加えられる(河内 2014)。当該資料は文様の特徴と、刺突文の痕跡から6世紀中葉の所産と考えられる。

3. 須恵器及び埴輪の出土地点の考察

次に、上記の須恵器及び埴輪の出土地点について考察を行う。

① 須恵器の出土地点

和歌山大学所蔵須恵器のうち3点には「海草郡西和佐村大字岩橋字大岩谷ヨリ発見」と墨書きの貼紙が貼られており、岩橋千塚古墳群から出土したものと分かる。字(小字)大岩谷の範囲は公図などにはなく特定できないが、岩橋千塚古墳群の前山B地区と大谷山地区の間に大岩谷池があり、おそらくその周辺と推測される。

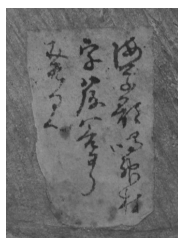
県立紀伊風土記の丘に寄託(個人蔵)されている装飾付須恵器にも同じく「紀伊国海草郡西和佐村大字岩橋字大岩谷ヨリ発見」と貼紙されたものがあり、同じ地区で発見されたものと考えられる。この装飾付須恵器は、明治40年(1907)に大野雲外によって紹介された著名なもので、図の解説(口繪説明)で「土器(動物附)は、紀伊國海草郡西和佐村大字岩橋小字大岩谷の古墳から発見したのである、この山腹には數百の古墳が散在してをる、近年に至りて

數多の古墳を發掘して種々なる遺物を取り出し、多くは他に散逸しましたと云ふことです」とあり、明治40年以前に發見されたことがわかる。岩橋千塚古墳群の盜掘は明治30年代から始まったと推測され³⁾(仲原 2016)、和歌山大学所蔵の須恵器も、明治40年以前(近年)に發掘(盜掘)されて散逸した遺物の1つである可能性がある。ただし、この裝飾付須恵器や和歌山大学所蔵の須恵器について、「大岩谷」出土であることがわかるだけで、出土古墳を特定することには至っていない。

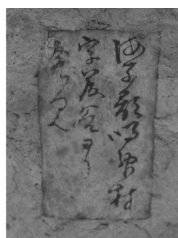
② 埴輪の出土地点

和歌山大学所蔵の埴輪のうち円筒埴輪の2点には「海草郡鳴神村字藤谷ヨリ發見」と貼紙されている。須恵器の貼紙と同形状であることから、近年の出土品とは考えにくい⁴⁾。

鳴神村字藤谷は、和紙に描かれた旧公図「名草郡鳴神村全圖(明治二十四年三月)」に「(字)藤谷」とあり⁵⁾、道路や墓地などの位置関係から、岩橋千塚古墳群の花山地区(花山古墳群)の中央部にあたると考えられ⁶⁾、同地区から發見されたものと推測される。実際



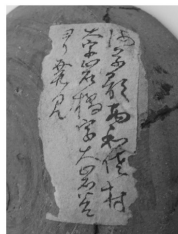
円筒埴輪 1 貼紙



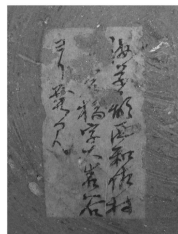
円筒埴輪 2 貼紙



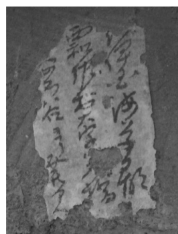
須恵器 甕 貼紙



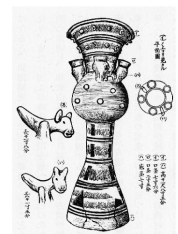
須恵器 杯蓋 貼紙



須恵器 杯身 貼紙



(参考) 大岩谷出土
裝飾付須恵器 貼紙



(参考) 大岩谷出土
裝飾付須恵器 図



(参考) 大岩谷出土
裝飾付須恵器 写真

写真5 伝岩橋千塚古墳群出土資料に貼られた貼紙

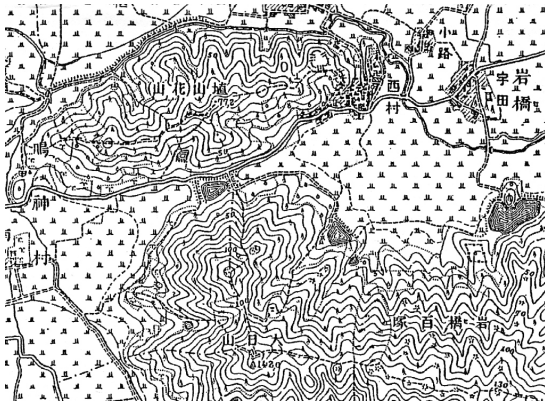


図5 陸地測量部地図(明治43年測図)

字藤谷であったかは正確には判別できないが、おそらく前方後円墳である花山6～8、33、36号墳が位置している中央の尾根部分にあたと推察できる(図7)。ただし、出土古墳は特定できず、この2点は同一古墳からの出土かも判明しない⁷⁾。

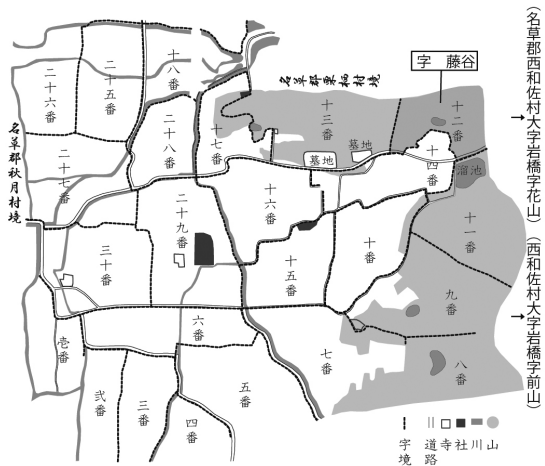


図6 和紙に描かれた旧公図(鳴神村全図)

次に石見型埴輪については、須恵器及び円筒埴輪にみられた貼紙はなく、器体に直接書かれた「WU628」・「WU629」の注記が確認できる。「WU」はおそらく Wakayama University の頭文字で、和歌山大学での資料整理の際に付けられた番号とみられるが、和歌山大学の遺物整理登録台帳にも出土地は記されて

いない。しかし、この埴輪はかつて「岩橋千塚出土」・「和歌山市西和佐・大岩谷の古墳出土」と紹介されており(和歌山県教委 1955、巽 1962)、須恵器と同じく岩橋千塚古墳群内の大岩谷からの出土と考えられるが、出土古墳を特定することはできない。一番古い報告は昭和30年(1955)であり、それ以前の発見であることはわかるが、発見時期は分かっていない⁸⁾。

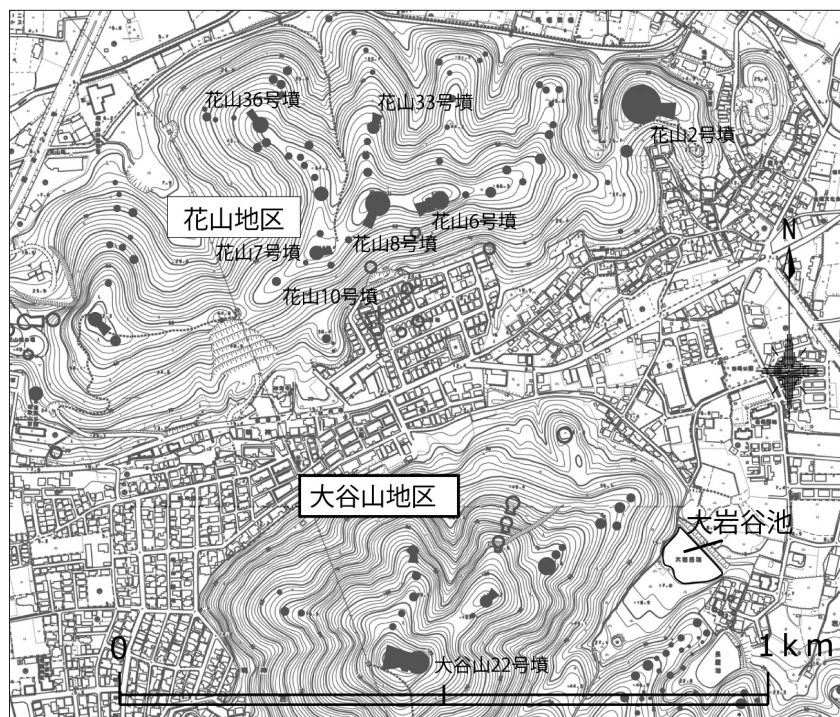


図7 花山地区・大谷山地区の古墳と大岩谷池の位置

4. 小結

以上、和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土の須恵器及び埴輪について、資料の特徴と時期及び出土位置についての検討を行った。伝岩橋千塚古墳群とされる資料は、出土地点等の記録がないものが多い中で、和歌山大学所蔵資料は資料採集時の記録が残されていたことにより、出土古墳の特定にまでは至らなかったものの、円筒埴輪2点が花山地区から、その他の資料が大岩谷から出土したことを明らかにすることができた。花山地区及び大岩谷周辺の古墳は、調査記録が少ないことから、その詳細については明らかでない部分が多い。こうした中で、この地区から出土した埴輪及び須恵器の器種及びその時期を明らかにできたことは、岩橋千塚古墳群の実像に迫るための重要な基礎資料となるだろう。

(はじめに・(4)：瀬谷、(1)・(2)：石丸、(3)：仲原が執筆し、遺物のトレースは富永が担当した。全体の体裁は全員の意見を元に瀬谷が編集した。)

注

- 1) 和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品の全体像を把握するため、個別研究等で報告されている資料についても、資料紹介及び検討の対象としている。
- 2) 石見型埴輪の各部位の名称は河内論文による。石見型埴輪については、これまで複数の検討、報告が行われている(図4)。

紀伊考古図録(図4-1)では岩橋千塚出土の楕形埴輪として報告されている。現存長さ56cm、幅約15cm、厚さ1.5cm、中央部より2つに折れているが、下部に円墳(円筒の誤りか)の一部が残存し、裏面には楕型を円筒部につけるための、一辺4cmの平板状の粘土帯を縦に貼り付けていることや、残存部から全体を復元すると、高さ約1m、幅15cmの大型の楕になることが記されている(和歌山県教育委員会 1955)。

巽三郎氏の研究(図4-2)では和歌山大学考古学研究会の保管資料であることが報告されている。出土古墳や出土状況等については不明とし、「和歌山市西和佐・大岩谷の古墳出土」の楕形埴輪残欠として紹介されている。楕の残長69cm、焼成は堅緻で、淡赤色を呈し、上部と下部に直弧文をあしらい、中央には鋸歯文を二段に描いていると記される(巽 1962)。

河内一浩氏の研究(図4-3)では和歌山大学考古学研究室に保管されている石見型埴輪であるが、出土した古墳や出土状況については不明であるとしている。

検討結果から、紀伊における石見型埴輪の施文方法において、上段面の表現が「3分割型」に分類される資料は、上段面の上辺にU字型の装飾を伴うことや、6世紀前葉と6世紀中葉の二形態が存在することを明らかにしている。大岩谷出土の石見型埴輪は、和歌山県出土の石見型埴輪として紹介されており、上段面は鋸歯文、下段面は無文、中央帯は2条一括、上辺は無し(正しくは、上段面と下段面は鱗状文、上段帯と下段帯に鋸歯文、中央帯は無文、施文方法は2条一括か)としている(河内 2000・2014・2019)。

- 3) 明治42年(1909)発行の『紀伊名所案内』に「明治三十三年(1900)の頃始めて発掘せられた、塚の中から刀剣が出る、勾玉が出る、甲冑が出る、埴輪が出るといふので、一

時はなかなかの騒ぎであつた」と記述されている(大川 1909)。また、皇室博物館(東京国立博物館)の『明治三十七年埋蔵物録』には明治36年(1903)に西和佐村字前山(岩橋千塚古墳群前山A地区)で盗掘された遺物(土器、鉄器計63点)が献納されたことあり、現在、東京国立博物館の収蔵品として登録されている(藤森 2013)。

- 4) 筆跡鑑定した訳ではないが、須恵器の蓋と身の貼紙の筆跡は似ている。甕の貼紙は丁寧に書かれており、同一とは判断できない。円筒埴輪2点の貼紙の筆跡は似ている。須恵器と円筒埴輪の筆跡は同一とは判断できない。ただし、いずれも「○○郡○○村(大字○○)字○○ヨリ発見」とあり、同時期に書かれたものと推測した。
- 5) 法務局で閲覧。
- 6) 花山地区の西側は字寺内、東側は名草郡西和佐村大字岩橋字花山(明治24年当時、旧公図)。陸地測量部地図(明治43年)や仮製地形図(昭和22年)では花山丘陵(花山地区)と岩橋丘陵(大日山地区)の間に池が確認でき、旧公図の溜池と位置関係が一致する。
- 7) 花山地区からは2、6、33、36、45号墳などで埴輪が出土している。
- 8) 巽 1962では「出土古墳・出土状況等に就いては全く不明。」とある。

引用・参考文献

- 井馬好英・藤藪勝則 2005「花山古墳群出土の埴輪について」『紀伊考古学研究』第8号(紀伊考古学研究会)
- 大川民純 1909『紀伊名所案内』(紀伊名所案内発行所)
- 大野雲外 1907「紀伊海草郡岩橋古墳発見祝部土器」『東京人類学会雑誌』第22巻第258号
- 河内一浩 2000「紀伊にみる石見型埴輪の様相」『紀伊考古学研究』第3号(紀伊考古学研究会)
- 河内一浩 2007「紀伊における石見型埴輪」『紀伊考古学研究』第10号(紀伊考古学研究会)
- 河内一浩 2014「石見型埴輪の地域性—紀伊・花山古墳群出土埴輪からの予察—」『郵政考古紀要』第59号(富加見泰彦先生退職記念論叢、通算68冊)(大阪・郵政考古学会)
- 河内一浩 2019「相方遺跡出土の石見型埴輪」『紀伊考古学研究』第22号(紀伊考古学研究会)
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 巽 三郎 1962「和歌山県下の形象埴輪に就いて(一)」『熊野路考古』1(南紀考古同好会)
- 仲原知之 2016「岩橋千塚古墳群の発掘調査・史跡指定の歩み」『紀伊風土記の丘研究紀要』第4号

和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について (1)

藤森寛志 2013「近代における和歌山県の埋蔵物の記録1」『紀伊風土記の丘研究紀要』創刊号

和歌山県教育委員会 1955『紀伊考古図録』

和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室1934『収蔵目録』

図版・写真出典

図1：筆者作成。

図2・3：平成25年度紀伊風土記の丘春期企画展『岩橋千塚発掘50年』で和歌山大学から借用時に仲原実測。富永がデジタルトレース。

写真1～5：平成25年度紀伊風土記の丘春期企画展『岩橋千塚発掘50年』で和歌山大学から借用時に紀伊風土記の丘撮影。写真5の装飾付須恵器の図は大野 1907から転載。装飾付須恵器の写真は紀伊風土記の丘提供。

図5：陸地測量部(明治43年測図、大正4年製版・発行)二万分の一地図を転載。

図6：法務局にて撮影した和紙に描かれた旧公図を簡易トレース(一部改変)。

図7：筆者作成。

